



ふおーらむ

第11号



図書館サポートフォーラム

目 次

巻頭特集

第 16 回「図書館サポートフォーラム賞」表彰式	2
--------------------------------	---

挨拶：山崎久道 氏

表彰講評、お祝いの言葉：水谷長志 氏

授賞のことば

栗田明子 氏

堀内佳美 氏

太田泰弘 氏

文集

山内明子「俳句八句」	12
------------------	----

末吉哲郎「川柳」	13
----------------	----

井上 如「商売ものは食べてはいけない」	14
---------------------------	----

恵光院白「我が国、初代総理大臣はテロリストだった	
--------------------------	--

—小保方問題後の我が資料調査の過程への余波」	15
------------------------------	----

岡田恵子「ある民俗学博物館と一本の幼木」	20
----------------------------	----

金沢幾子「展覧会目録から来日人名を知る」	22
----------------------------	----

菊池 佑「日本病院患者図書館協会創立 40 周年を振り返って」	28
---------------------------------------	----

平井紀子「「第 3 回日ソ青年友好祭」忘備録」	31
-------------------------------	----

平川千宏「「私の出会った人・本・山	
-------------------	--

—あるライブラリアンのあゆみ」出版始末記」	34
-----------------------------	----

水谷長志「いま図書館で図書館員として働くことの困難	
---------------------------	--

—逃げおおせられたからって、それでよいとは言えないし」 ..	36
--------------------------------	----

編集後記

第16回図書館サポーターフォーラム賞授賞式

於／2014年4月21日(月)

喜山倶楽部光琳の間(日本教育会館内9階)

1. 挨拶

山崎久道氏

(図書館サポーターフォーラム代表幹事)

ただいまご紹介に預かりました、図書館サポーターフォーラムの代表幹事を務めさせていただいております山崎久道と申します。

図書館サポーターフォーラムという名前を初めて耳にする方もおられるかと思いますが、簡単にご説明申し上げますと、ここにいらっしゃいます末吉哲郎さんが最初にコンセプトをお作りになり、皆に呼びかけてできた団体です。

図書館の仕事を長年勤められて退職されたり、あるいは図書館情報学の先生になって年を重ねられた後もこの分野に関心を持続けている、そういった方達が、現役の図書館員に対して何らかの応援団みたいなものを作ろうじゃないかということで始めたわけです。その意味で

サポーターというのは、まさにサッカーのサポーターのような考え方だと思います。

その流れの中で図書館員だけでなく、図書館に関連する仕事をなされている方まで含めて応援しているということ、この図書館サポーターフォーラム賞という表彰事業を会の発足と同時に始めました。今回で第16回を迎えることになり、毎回平均3名の方を表彰させていただいております。

この賞のコンセプトは、大体三つの柱に要約できるかと思っています。

1番目は、図書館で日頃地道に様々なお仕事を、例えば索引や書誌の作成、あるいは図書館を使いやすくするためのマニュアルづくりなど、地味でなかなか世間に認められにくい、しかしながら非常に価値のある仕事をされてきた方達がおられます。そういった地道な図書館活動やその成果を顕彰させていただくというのが、第一の柱となっています。

2番目は、図書館をより広く社会の中に位置づける活動に対してです。日本では図書館は社会の中で決して目立つような地位を占めているわけではありません。しかしながら図書館というものが社会において非常に重要な役割があるということ、ここにお集まりの皆さんはよくご存じかと思えます。その図書館を社会の中にきちんと位置づける、あるいは図書館の重要性を社会に強くアピールするといった活動に従事されている方がおられます。そういった活動を図書館と社会という文脈の中で顕彰させていただくというのが、第二の柱となっています。

3番目は、図書館の国際化と云いましょうか、ご案内のように図書館や日本というものは一国だけで成り立つものではなく、国際的な協力あるいはグローバルな環境の中で存在するということです。例えば図書館を通じて途上国に対する支援や異文化交流を成し遂げたということとは大変立派な業績なわけです。そういった活動を図書館と国際性という観点から顕彰させていただくというのが、第三の柱となっています。

大体この専門性、社会性、国際性といった三つの柱にもとづいて、毎年表彰選考を行ってきているわけでありです。

表彰選考の内容についてはこの後水谷表彰委員長より詳細をご説明いただきますので、私からは省略させていただきたいと思います。

最後にこの図書館サポートフォーラム賞に關しまして、日外アソシエーツ株式会社が一貫して支援して下さっているということで、この賞がここまで成長し続けてくることができたことに感謝を申し上げて、私からのご挨拶とさせていただきますと思います。

どうもありがとうございます。

2. 表彰講評

水谷長志氏

(表彰委員会委員長)

図書館サポートフォーラム表彰委員長をしております東京国立近代美術館の水谷と申します。よろしく願います。

早速ですが、第16回図書館サポートフォーラム賞の表彰結果についてご報告いたします。

今回は、図書館サポートフォーラムの会員および事務局の推薦により、いずれも個人、9名の方が表彰候補となりました。

この数は昨年の6件よりも多い推薦でありまして、今年もまた、いずれの方についても、図書館員および図書館の外から図書館をサポートされ、図書館活動を推進するお仕事をされてい

て、いずれも高い業績と評価をすでにお持ちの方々でありました。

選考は3月17日、大森の日外アソシエーツにおいて12名の出席幹事による投票および4名の不在幹事の通信投票によることとなりました。

実はこの出席幹事のお一人が被推薦者でありましたため、本会の監事をお引き受けただいてゐる太田泰弘様がその被推薦者であるのですが、いささかの議論の末、投票の透明性などを担保するために、太田様ご自身のご投票は、今回に限ってはご辞退していただくことになりました。

出席・不在のあわせて15名の幹事による投票が行われ、その結果、この度の第16回図書館サポートフォーラム賞は栗田明子様、堀内佳美(よしみ)様、太田泰弘様のお三人様が受賞されることになりました。

では、順に第16回図書館サポートフォーラム賞の表彰理由について述べさせていただきます。

まず、栗田明子様(株)日本著作権輸出センター(JFC)相談役)の表彰理由を申し上げます。

明治以来日本は、文芸においては大変な輸入超過大国である。日本人の著作が海外の出版社に紹介されて、翻訳され、海外の図書館に入り、そして多様な国民に読まれ、理解されるこ

とも念頭に、栗田氏は日本の著作権輸出という困難に果敢に取り組んだまさにパイオニアである。その著書『海の向こうに本を届ける著作権輸出への道』(晶文社、2011)は、まるで出版界の「兼高かおる世界の旅」のように刺激的であり、エンカレッシングな記録であり、またチャミングな自伝的著作である。栗田氏による、著作権輸出の仕事は、出版ビジネスを世界的にし、そして図書館の棚を国の内外において広く豊かにした。その功績は、図書館サポートフォーラム賞にふさわしいものであり、評価し表彰するものである。

2年前、2012年1月15日の朝日新聞の「著者に会いたい」に「海の向こうに本を届ける」の著者として栗田様が「『出版は志』の言葉を胸に」と題されてお写真とともに掲載されておりました。早速、ご著書を買いに走ったのですが、栗田様のお名前と日本著作権輸出センターおよびご同士であった板東悠美子さん(日本国際児童図書評議会(JBBY)会長)とは、実は、筑波にあった図書館情報大学において、私が学生であった、遙か昔の30年前に遭遇していたのでした。

それは、1984年5月13日の同じ朝日新聞の「ひと」の欄でした。「日本著作権輸出センター」を発足させた板東悠美子さん」という記事

に強い感銘を受けたからであります。1984の夏には、当時、四谷にあった国際交流基金の図書室で図書館実習の予定が入っていましたので、著作権輸出というお仕事に殊更に強い印象があつたでしょう。

さて、「兼高かおる世界の旅」のような『海の向こうに本を届ける』を楽しく拝読して、さらに栗田様のお仕事について調べましたら、この本の前に国土社から「青春ノート」の第10番目として、『ゆめの宝石箱』が1986年に書かれていたこと、そして、おそらくは栗田さんモデルに小説家の小川洋子さんが、『ミナ行進』を2006年に出されて、第42回谷崎潤一郎賞を受賞されたことを知りました。そして『海の向こうに本を届ける』の帯には、小川洋子さんは、「日本文学を海外へ導いたのは、海図のない航海へ出た栗田さんの熱意だった」と書いているのです。著作権輸出というお仕事に、単にライツ・マネージメントのビジネスを越えて、はるかに深い連帯を栗田さんは著者との間に築かれていることに、あらためて感銘いたしました。そのようなお仕事に、いかに日本と海外の図書館の棚を豊かにしたかを思いながら、図書館サポートフォーラム賞をお受けいただき、選考委員の一人として深い感謝の念を覚えるのであります。

次いで、堀内佳美様（アークどこでも本読み隊代表）の表彰理由を読み上げます。

堀内氏は全旨にもかかわらず、2010年よりタイに暮らしながら、「アークどこでも本読み隊」を立ち上げた。読書の機会が少ない子どもたちに読書会を開く移動図書館の活動を続けて、2013年11月にはコミュニティ図書館もオープンさせた。タイ国内には70以上の少数民族や1,000万人以上の障害者がおり、その多くは学校や図書館の施設が少ない農村部に暮らしている。そのような環境の中、「本は世界の窓」をキャッチフレーズに、自らのハンデキャップをもとめせず、子どもたちに本や物語を届け、読書や学習の機会を現地のタイ人スタッフとともに展開している。「アークどこでも本読み隊」の運営は、海外における読書推進活動のよきモデルを実践・提示していると言える。今後の継続発展への期待をこめつつ、その国際性と行動力を高く評価し表彰するものである。

私自身は、堀内様とアークどこでも本読み隊のご活動は、寡聞にして存じませんでした。今回の推薦と関連資料、そして「アークどこでも本読み隊・堀内佳美応援ブログ」(<http://blog.canpan.info/arc-yoshimi/>)をあらためて拝見

して、なんとという勇氣と行動力とそしてユーモアのセンスのある若き女性がいたものか、と感嘆いたしました。

ブログのトップには次のような、大文字で並ぶ堀内さんのメッセージが並んでいます。

・「本は世界の窓」

・「知れたーい！もつとみてみたいーうん、いつてみよう！！」

・「機会は平等でなくつつちゃー！！」

・「子どもたちのスイッチONー！！」

・旅は今タイで始まったばかりです。

・キャラバンと夢を！！

このようなメッセージを振り撒かれつつ、これから、さらに「本」と「図書館」の新しい可能性を切り開かれんことを、あらためて願うものであります。

本日は堀内様ご自身のご出席はかきませんでしたが、ブログを始めさまざまに堀内さんをサポートされている岡村亜矢子さんが代理出席してくださいました。加えて堀内さんご自身のビデオレターが届いているということですので、楽しみに拝見したいと思います。

最後に太田泰弘様（元・味の素食の文化センター主任研究員／前・文教大学教授）の表彰理由を読み上げます。

太田氏は味の素食の文化センター主任研究員として在職中から約30年に亘り調査研究した成果を『日本食文化図書目録 江戸～近代』（日外アソシエーツ、2008）として刊行した。本書はわが国の江戸時代以降の食文化に関わる6,300件の図書の解題書誌であり、570頁に及ぶ類書の無い大著労作である。2013年に和食は世界遺産としてユネスコに登録され、本書の価値はますます高まるに違いない。加えて文教大学国際学部教授、情報知識学会専門用語研究部会長、日本ドクメンテーション協会（現・情報科学技術協会）理事等歴任の他、神奈川県資料室研究会など企業間ネットワークの設立に尽力されるなど、多岐にわたる氏の功績を評価し表彰するものである。

図書館、とりわけ専門図書館やドキュメンテーションに関わる人で太田様のお名前とご業績に触れたことの無い方は皆無でありましょう。図書館サポートフォーラムにおいては、皿の字の監事をお引き受けただいておりまして、フォーラムが続いているのも太田様のご献身に拠るところが大であります。

冒頭お話ししましたように、そのフォーラムの監事をフォーラム賞の受賞者として選考することにはいささかの躊躇があったのは、事実であります。躊躇というのは正確ではないかもしれませんが、

ません。太田様のご業績に対しては、本フォーラムが、11回、2009年において、図書館サポートフォーラム賞特別表彰を末吉哲郎様（前・図書館サポートフォーラム代表幹事）にお贈りしたのと同じが良いのではないか、という議論もあったのでした。

しかしながら、太田様の『日本食文化図書目録 江戸～近代』に代表される、食の文化へのドキュメンテーション、食のドキュメンタリストとしてのご実績こそ、真率にフォーラムが評価するべきであることを選考会は思い直し、本日の結果となりました。

私自身は、太田様の知見の広さを、一昨年の金沢大友楼の古都金沢の食のアーカイブ、ならびに昨年の西尾市岩瀬文庫の見学会に一緒にさせていただいたことにより、何よりも忘れがたく、有難い体験を授かったことに、あらためてお礼申し上げたいと存じます。ぜひまた、太田様のプランニングで食のアーカイブ探訪の旅へと連れて行ってくだされば幸いです。

第16回を迎える図書館サポートフォーラム賞も、この賞の三つの柱にかなって、長年の研鑽と国際性、そして図書館のあることの意義の発露顕現をよく示すお三方に授賞いただき、選考委員長として、ことのほか嬉しく思っております。

以上をもちまして、簡単ではございますが、今回の図書館サポートフォーラム賞の表彰者のご紹介とさせていただきます。ご静聴ありがとうございます。

栗田様お祝いの言葉

本日、サポートフォーラム賞の受賞式において表彰委員長の立場から栗田様の表彰理由を述べた中で、1984年5月13日の朝日新聞「ひと」の欄のことに触れました。私はその時は、二度目の春を筑波の図書館情報大学で迎えたところでした。

同時に、筑波での2年間は、図書館実習に国際交流基金図書館を選んだほどに、私の人生の前後にはまったく無いほどに、高い海外志向が募っていた頃でした。ですので、この日本著作権センターを発足させた板東さん、栗田さん、そして著作権輸出というお仕事のあることに強烈な印象を持ったことを記憶しております。

海外志向はなお抱きつつも国立大学図書館員の採用試験をなんとか通り、結果としてはなぜか国立大学には行かないで、竹橋の国立近代美術館に採用され、来年なんと30年目を迎えます。

1984年の朝日新聞の「ひと」の欄が、なぜかずっと、およそ30年間も、私の頭から離

れませんでした。その間、「出版ニュース」ほかで日本著作権輸出センターと栗田様のお仕事とお名前は拝見していたのですが、ようやくこの図書館サポートフォーラム賞の授賞式という場で、かつての憧れの、栗田様そして板東様という、お二人の女性とこのような形で会えてきて、お二人にはさまれて、いま立っていることの不思議と幸せに、ただただ感激しております。人生待つということも大事で良いものです。ね。

以上、まことに極めて私的な言葉の数々ですが、これにて栗田様の受賞のお祝いの言葉に代えさせていただきます。

3. 授賞のことば

栗田明子氏

(株)日本著作権輸出センター創業者・相談役

栗田明子です。

本日はほんとうにありがとうございました。

著作権輸出の仕事の後継者に譲り、故郷の芦屋でのんびり過ごしておりますら、私の知らない「図書館サポートフォーラム」から、表彰



して下さるといふメールが来まして、びっくりいたしました。別にあやしい団体だとは思いませんでしたが、事務局が日外アソシエーツとありました。

同社の社長と専務には「出版研究創の会」という出版社の創業者の会で、奇数月の例会でお目にかかっているものですから、思わず「ご存知でしょうか？」とお尋ねしてしまいました。

「営業担当の役員が事務局をお引き受けしています」とのお返事で、いよいよ安心し、ホームページを開きました。東京子ども図書館理事長の松岡享子さんも受賞されており、何度かお目にかかったことがある日本点字図書館の創立者、故・本間一夫先生のお名前もありました。

「でも、なぜ？」という疑問を持ちました。在職中に日本図書館協会で、「児童図書館員養成講座」を、全国から応募された図書館員のた

めに、何年か受け持たせていただいたことかしら？

あるいは、日本点字図書館で谷崎潤一郎の「細雪」など、朗読奉仕をしたからかしら？とあれこれ考えながら読み進むと、「まるで「出版界の兼高かおる世界の旅」のように刺激的で…」と、推薦のお言葉が出てきました。そして、じわじわと喜びが湧いて参りました。当時、兼高かおるさんは世界への窓を開いて下さった憧れの方でした。まことに光栄なことです。

75歳で退任してから、何度か海外に出ました。その時、書店や図書館で私の橋渡しで出版された本に出会うと、まるで子供や孫にでもあったような喜びを感じます。黒子の仕事を認めていただいたことが、大きな喜びです。改めて、撰者の皆様にお礼を申し上げます。

もとはといえば、使命感というよりも、好奇心に突き動かされてやり始めたことです。「これも日本の心の輸出を手がけていない」ことに気が付いて「誰かがいつか」やらなくてはならない仕事、それなら「私でしょ、今でしょ」と考えたわけです。

昨今「今でしょ」というセリフが流行っていますが、思い当たることがあります。1986年に国土社から出版していただいた『ゆめの宝石箱』という著書で触れましたが、「タルムード」というユダヤ人のための聖典の一節です。

エーリッヒ・フロムの『自由からの逃走』で見つけた言葉です。簡単ですので英語でご披露します。

“If I am not for myself, who will be for me?”

If I am for myself only, what am I?

If not now — when?

簡単に申しますと、「自分を生きよ、今を生きよ」ということだと解釈して、私の座右の銘としておりました。

自分が出来ること、自分しかできないことを実行しよう、それは今だ！と考えて実行しました。

小川洋子さんが「日本文学を海外へ導いたのは、海図のない航海に出た栗田さんの熱意だった」と本の帯に書いて下さったのですが、まったく無鉄砲な船出だったと思います。何とかなる、という思いでこつこつ歩みだしたわけですが、26年を経て、後継者に譲る時点では、40か国を相手に、13,000件の契約管理を行うようになつていたのは、自分でも意外でした。

私一人の力ではなく、周囲の皆さんのお力添え、日本の図書に興味を持って下さった海外編集者あつてのことです。その皆様に感謝いたします。とりわけ、栗田・板東事務所で苦勞を共にした、板東悠美子さんに深謝したいと思いま

す。今日もご出席いただき、ありがとうございます。

実は、独立して仕事をやろうと決心したときに、作家の河野多恵子さんにご挨拶に参りました。問われるままに生年月日をお伝えしますと、占ってくださいまして、「大金もちにはならへんけど、生活に困ることはないわ。なんでも好きなことしたらええわ」と励まして下さったのです。それで安心して船出が出来ました。幸か不幸か、ギリシャの大金持ちに出会うことはなかったのですが、何かマイナスになることがあると、それと同等かそれ以上の契約申し込みが降って湧いて来るとか、ちょっと不思議な感覚になることがあつたりしました。

父は、女が大学に行つても役に立たん、と申しました。「学校の先生になるのが精いっぱい、先生になつたらお嫁に行きそびれる」とは、明治生まれの父の言い分でしたが、今は、ひょっとして苦笑いをしながら、守つていてくれたのかもしれないと思つています。

ケルンで、愛車のフォルクスワーゲンゴルフに、間違つてガソリンの代わりに軽油を飲ませてしまったことがありましたが、追突されたりせずに、ぶぶぶーつと不満げに三車線の真ん中に立ち往生するだけで難を逃れました。その種の失敗談をお話しし始めたらしきありません。

80歳にして、このような光榮に浴したことをほんとうに、うれしく存じます。大きなご褒美をいただきました。どうも、ありがとうございます。

堀内佳美氏

(アークどこでも本読み隊代表)

本日は、図書館サポーターフォーラム賞という、大変名誉ある賞をいただき、本当にありがとうございます。この場を借りまして、私アークどこでも本読み隊（以下アーク）を立ち上げるにいたつた経緯を、タイの読書事情を含めてお話させていただきたいと思ひます。

私は、物心つくかつかない頃から、自他共に



認める本の虫として育ってきました。ですが、生まれつきほとんど視力がなかったため、家族や近所の親戚に、もっぱら読み聞かせをしてもらっていました。絵本は字が少なく、お話としての物語性が少ないため物足りなかったのか、ずいぶん小さい頃から主に児童図書を好んで読んでもらったように記憶しています。点字が読めるようになってからは、全国の点訳・音訳ボランティアの皆さんが作ってくださった図書を片っ端から読みました。つまり、現在に至るまで、私の読書生活は、多くの方の支援の上に成り立っているのです。

成長する中で、国際協力の分野に興味を抱くようになったのですが、大学時代から毎年のように通うようになったタイの読書事情を知ったとき、自分自身がいつも回りの皆さんにお世話になっているこの分野で、私も何かしたいと思うようになったのは、とても自然なことのように思います。

タイは東南アジアに位置する中進国で、識字率は男女共に90%と、一見比較的恵まれた環境に見えます。しかし、平均読書量が年間一人当たり7行などというデータが、まことしやかに出回るほどの読書貧困国です。特に、子供たちの置かれた状況は深刻です。実際ユネスコの調査によると、同じくアセアン（ASEAN）に属するシンガポールやベトナムで、子供の年間

平均読書量が40〜60冊であるのに対し、タイでは平均5冊しか読まれています。大人で本を読むのは、ほとんどが都会のいわゆるホワイトカラーと呼ばれる中流階級以上の層に限られています。

これには、市場のほかの商品に比べて、書籍の値段がかなり高価であることや、図書館や書店が少なく、そのほとんどが都会に集中していること、また多くのタイ人が、本に対して、勉強のための小難しいやっかいな存在だという、偏ったイメージを持っていることなどが原因として挙げられます。このように、一般の国民にとっても手が届きにくい書籍は、障害者や高齢者、貧困層や少数民族など、より社会的に弱い立場にある人たちにとって、さらに遠い存在になってしまっているのが現状です。

私は、アークどこでも本読み隊という小さい団体を立ち上げ、2010年から読書とタイの人たちをつなげる活動をしてきました。現在、北部のチェンマイ県プラオ郡で蔵書5,000冊弱のランマイ図書館を運営し、そこを中心に郡内の村や僻地の学校などに移動図書館活動を展開しています。また、母語や文化がまったく違うために、就学時に遅れがちになる山岳民族の子供たちに、幼児期の段階で基礎的な識字能力を身につけてもらうためのセンターを2箇所運営しています。全体をあわせても職員6人と

いう、非常に小さな団体で、活動も草の根そのものなので、国全体でみて影響力があるものとは言えませんが、一人でも多くの人たちに読書の持つ魅力、本が導いてくれる世界の広さを実感してもらえようと日々願いながら活動しています。



※写真は代理出席の岡村氏

読書とは、どんな環境にいても、そこから1歩も踏み出すことなく、広い世界を存分に眺め渡すことができる大きな窓だと思います。私自身、高知県の兼業農家の次女として育った幼少期より、この魔法の窓からたくさんのものを見てきました。年齢や経済状況、障害の有無に関係なく、多くの人たちにこの窓の存在を知ってもらい、カーテンを開けてさまざまな景色を楽しむ醍醐味を知ってもらえるような活動を、今

後も続けていく所存です。

最後になりましたが、まだ活動年数5年にも満たないアークを運営する私に、このような機会をくださった図書館サポートフォーラムの皆様に、改めまして心より御礼申し上げます。有難うございました。

太田泰弘氏

これまでのこと、これからのこと

1 はじめに

馬齢を重ねて、今年（2014）は私の当り年です。何か良いことが当たりますよという正月の初夢が正夢となりました。「図書館サポートフォーラム」で監事という役職を引き受けているため、受賞にためらいがありました。私の活動の後押しをしていただいた多くの方々を含めてのことと受け止め、ありがたいたくこととしました。以下の記事は、受賞の挨拶を文章にしてほしいと事務局から依頼され、そもその部分とこれからの部分を付け足してまとめたものです。

図書館サポートフォーラム 総会・授賞式



2 そもそのものこと

自宅から小学校への往復には電車（東京市電）を利用し、その乗り換え場所は神田神保町だった。天気の良いときには放課後に九段下から神保町までぶらぶら歩くことが多く、両側にならぶ古書店の書棚のあいだを歩きまわるのが習慣となった。表紙や背中をなでただけだったが、書物への愛着が高じて、中学校で最初の図書委員を指名されるまでになった。

戦後は通学路である中央線の電車の窓から飯田橋の堀端に建つ東京物理学校（現在の東京理科大学）の校舎を見るのが日課となった。不在地主になることを恐れて立川近郊での畑仕事に励んだため、受験勉強が身につかず、結果として、入学はやさしいが卒業は難しい（三分の一？）という評判に惹かれて同校に入学した。

驚いたことに当時の教授陣には旧制大学の錚々たるメンバーが揃っていた。学校の設立理由からすれば当然なことであった。教授陣の一人、植村琢先生（東京工業大学教授）は無機化学の大家で、大学の図書館長を兼ねておられ、私は中学校の大先輩ということでお目にかかる機会ができた。1949年夏のこと、日本化学会の図書室に積んだままの雑誌の整理をすすめられた。当時の学生はアルバイトをするのが当たり前だったが、私は夏休みだからといってアルバイトにしばられることがなかったので安請け合。日本化学会事務局は木造二階建てで現在と同じ場所（お茶の水）にあった。外国書の購入がままならない時代ではあったが、専門雑誌は交換で入ってきた。交換だから、中身は英語、ドイツ語、フランス語に限らない。初めて見る言語に困惑の毎日だった。このことが、後日化学ドキュメンテーションに入り込み、日本化学会化学情報委員会の末席に加わるきっかけとなった。

卒業研究で先行文献を調査する段階になって、専門学校の悲しさ、図書館で該当文献を読むことは不可能に近かった。同じ悲哀をもつ仲間と相談した結果が、*「化学文献所在目録」*の編集活動となった。強力な後押しは馬場重徳先生（当時は文部省学術情報主任官、後に図書館短期大学教授）であった。最初は東京工業大学

図書館に事務局を置く学術文献普及会の出版物として、後に丸善の出版物として4版を重ねた。

Cf. 書誌とのつきあい、薬学図書館33(3)、

173—179(1988)

『化学文献所在目録』刊行の思い出(座談会記録)、SUT Bull. 8(4)、

2—13(1991)

3 三つの提案

味の素株式会社への入社は情報活動担当を期待されていたことではなかった。しかし、入社前の体験は情報活動への偏向を促すことになった。定年までの主だった提案は3件(社内ドキュメンテーション、ドキュメンテーションの地域協力、食文化活動)、いずれも企業活動の一端だが、私の提案がきっかけになったと密かに自負している。

入社後3年にしての最初の提案は社内ドキュメンテーション組織を立ち上げることであった。周囲は当惑したようだが、文献や歴史に関心が高い上司をもったこともあって、1956年に中央研究所が設立されたときには独立の図書室を置くことができた。設立の経緯が幸いしたともいえる。宇宙開発に遅れをとったアメリカが官民あげてドキュメンテーション

の強化に取り組んだという情報が日本企業の関心をよび、ドキュメンテーションの社内組織化を始めたという時期でもあり、関連セミナーの講師を立て続けに引き受けることもなった。

活動分野を広めたい企業は自社内の情報資源があまりにも貧弱であることに気づき、閉鎖性を打破して他社との相互協力を望む声が高まった。「ドキュメンテーション懇談会」は京浜地区に研究所をもつ企業3社をメンバーとして1956年に発足したネットワークであった。

1958年に川崎市内に設立された神奈川県立川崎図書館は工業専門図書館を強調するための支援グループとして「京浜地区資料室運営研究会」(現在は「神奈川県資料室研究会」に改称)を1961年に結成した。私はいずれにも創設者の一員として参画した。

Cf. ドキュメンテーション懇談会発足当時のこ

と

と 歩きはじめた頃、ドキュメンテーション懇談会会報、7、15—17(1959)

神奈川県資料室研究会発足当時のこと

『創成期メンバーが語る神資研…(神資研創立50周年記念座談会)』、神資研、45、32—43(2011)

三番目の提案は文化活動組織の設立である。

味の素株式会社は創立70周年記念事業として恒例的な事業に加えての新しい事業を模索して

いた。当時の副社長は研究所における私の最初の上司であって事業委員長を兼ねており、斬新的な提案を求められた。直前にパリに所在するポンピドー美術館を見学する機会があり、その印象もあって文化活動を推薦した。それは面白いということと実現をみたのが食の文化事業、現在の「(公益財団法人)味の素食の文化センター」の活動である。その活動のなかでの私の分担は食文化に関する文献目録および用語集の編集であった。いずれも、食文化を独立の学術領域とするために必須の道具である。定価をつけて売るような代物ではないので、少数を印刷して実費で配布した。内容を頻繁に改訂せねばならないという事情もあった。退職後もこの仕事を続け、2014年4月現在で、文献目録は66編、用語集は71編までになった。日外アソシエーツから声がかかって、食文化に関する文献目録…江戸編、明治、大正編、昭和編をまとめて単行書となった。これが受賞の主対象となった。

Cf. 味の素(株)における「食の文化」事業、

食品工業、24(1)、48—52(1981)

『学際領域としての食文化とその書誌活動』、書誌索引展望、9(2)、25—28(1985)

4 これからのこと

「図書館サポーターフォーラム賞」は業績に對して与えられるだけのものではなく、これから継続することへの期待もこめられている。だから、これで引退ということにはならない。現在の立場でできることは、「食文化に関する文献目録・用語集」の改訂を続けることであろう。ほかにもいくつかの仕事を提案し、かけずり回っている。健康だから続けるというのではなく、期限付きのプロジェクトを引き受けているから病気になるということだ。そのため、に多くの方々に迷惑がかかるかもしれないが、先がないというおどし文句に御寛容いただければ幸いである。

俳句八句

山内 明子

眼張盛る煮汁に落ちし目玉はめ
春泥に貸しくれし手を離さざる
車の扉尻もて閉ぢぬ手に花ござ
基地の街鉄条網にいか干せる
鯨釣り見る自転車降りず片足つき
甚平に着替えてもらふ帰るまで
両隣始む雪掻きしぶしぶ出る
ふぐ食うて一円単位まで割り勘

川柳

末吉 哲郎

ホールインワン夢の中では何度でも

洗い出す過去にしみなし光なし

貧乏のせいだけでない子沢山

今一度生めよ殖やせよキャンペーン

沖縄戦えぐる少年平和の詩

過去捨てて巻きなおすには時間切れ

医者通いポイント制はいかがかな

捨てるわれ拾うかみさんゴミ館

オリンピックあと七年は生きてやる

商売ものは食べてはいけない

井上 如

平成22年の暮れ、鎌倉から神戸に引越すとき、大半の蔵書は捨てた。蔵書を捨てるのはこれが初めてではないが、この時は気構えも手伝って、九割近く、思い切って捨てた。それでもどうしても捨てられないものが残るのは仕方がない。その中には、分野で言うところ、長年愛用した辞書の類がある。本居宣長が、日本語などと言うものは、そもそも（一国の）言語として存在したかどうかすら疑わしいなどと言って脅かすものだから、しめしめと思って、国語の勉強をことのほか怠けたのが祟って、辞書なしでは手紙一本書けない物書き音痴になってしまった。以後、強迫観念として御辞書様から抜け出せない。辞書以外で手元に残したものの第一を書名で言えば、丸善の「本の図書館」館長だった八木佐吉翁が、「学鑑」の編集や、和洋書籍目録編纂の経験を踏まえて書いた「書物往来」がある。何がユニークと言って、自分にとってこれほどユニークな書物は無い。落語から引用

して、〃酒やさんが酒ずき、お菓子やさんが甘いものずき〃だったらいったいどうなるか。〃商売に差しさわりが出来て来る。本屋がいかに興を引かれる本でも全部を読んでいたんでは商売に差しさわりが出来て来る。商売ものは食べてはいけない〃（書物往来p. 368―369）と言う。そして、本と対峙したらそこに〃ほかの本にないようなことを見つけること、それが本屋の仕事だ〃という。

今からちょうど3年前、「ふぉーらむ」第8号に、〃本は読むものか書くものか〃という題でEssayを書かせてもらった。自分としてはもちろん本は書くものであって、読むものではないということを言いたかった。余勢を駆って、次に〃本は集めるものか捨てるものか〃という題で、もちろん本はどんどん捨てるべきだという趣旨の下書きを書いたまではよかったが、勢い余って、自分の書いた本（複数著者の共著だが手元にあった最後の一冊）まで捨てて

しまったことに後で気が付いた。幸か不幸か、昭和56年4月号の「ドクメンテーション研究」に、依頼原稿が投稿が判らなくなってしまったが「10大ニュース」のドキュメンテーション〃〃という一文を載せて貰っていたのを見つけた。論題について七つのポイントを挙げて、しかし、終始一貫、ドキュメンテーションとは、廃棄の技術であると説いている。今読んでみると、本は捨てるべきものと主張する説得力において、あとから書いた上記下書きよりこの方がずっと優れた文章になっていたので、多少、ホツとしてゐる。

神戸に越すとき、手元に残した、辞書以外の洋書はいずれも大部で、Maurice RickardsのEncyclopedia of Ephemeris、John LewisのPrinted Ephemerisの2冊である。文章を書く時、手書きと、ポチンコポチンコ機械で入力・作文する時の違いを一度考えてみたいと思って座右に残したのだが、今この2冊の大著は、あらゆる書物を単なるEphemerisと見破った大先達、慧眼の師八木さんが、私に残してくれた問題集だと思っている。

我が国、初代総理大臣はテロリストだった

——小保方問題後の我が資料調査への余波——

恵光院 白

小文は伊藤博文がテロリストであった事を調べた過程だけではなく、昨今の小保方問題以後の我が調査での、いわば「襟を正した」顛末を綴ってみたいとおもう。まずはご一読をお願いしたい。

以前より筆者はテーマとして幕末期、旧信濃国・須坂藩の第一二代藩主、堀直格、同著編、《堀氏・花洒家文庫》とその周辺を調べてきた。その関係者の一人、堀忠宝（ハナワ・タダトミ、文末注一、同*文献A）とは、堀の運営する《和学講談所》の蔵書類を、堀直格が黒川春村を通して閲覧し、謄本、記録化した等が想定される、という間柄であった。また堀直格著編二種が《和学講談所》の堀の手を経て、《昌平坂学問所》に提出され出版許可を受け、後日同《学問所》に献納されている。これは右《講談所》の業務の一つであり、珍しい部類に入る幕府の関わる出版物である（*同A）。両人は年令も近く文

学（当時学術、書物、美術、歴史、風雅の領域を「文学」と呼んだようだ）の間での知己であった。これとは別にこの《和学講談所》の主宰者・堀忠宝が、伊藤博文によって非業の死を余儀なくされた事は筆者は以前から知っていた。しかしその原因と経緯、後々の事々は知らなかった。

さて何年前か、池袋の某大手書店の店内、幕末維新区分のコーナー前で立ち読みしていた時の事である。「堀忠宝」や他の資料のあれこれを探していた。何と！彼・堀忠宝が伊藤博文（当時、俊輔）によって暗殺されたその背景説明の一文を発見した。漸く見つけた安堵感で、店を出て、大通りのカフェで暫し休息し、詰まらぬ物思いで時間を潰した。堀と伊藤の事はもちろんだが、もう一人、筆者の別テーマである「朝岡興禎」（注三、文献B）の歌道の師・前田夏蔭（注四、*文献C、D）も内偵暗殺の対象だった事には驚きだった。堀と前田の二人は世俗から遠く、文人中の文人だったからである。しか

しその夕、実に迂闊にも棚前でメモも取らずそのまま帰宅してしまい、当の暗殺の件りが何という『書名』の本に載っているのかは分からないままとなってしまった。以後約半年間、その某大手書店上階に日参ならぬ週参、月参する事になった。書誌を仕事にしている者としては、惨めな失格である。

その間、大中の図書館で、堀忠宝、伊藤博文のあれこれを検索し、メモしたり、複写作業が続いた。ここで分かった事柄を略記したい。

話しは、伊藤博文の死（一九〇九／明治四二年一〇月の安重根による暗殺）および山尾庸三の死（一九一七／大正〇六年一二月）を待っての、伊藤と交遊のあった渋沢栄一の述懐によるものとされる（一九二三／大正一二年〇六月、愛染院（新宿区）に於ける、堀保己一百年祭と忠宝六〇年祭の折に、渋沢子爵に依る懷旧談の記録。*文献E、F）。伊藤は渋沢以外には口にしなかったらしい。伊藤は事前に国学入門にこと寄せて《和学講談所》・堀忠宝に面会して顔を確認しておき、一八六二／文久〇二年二月二一日当日、現靖国神社から指呼の間にある番町の堀家の屋敷、同《和学講談所》の近くで（一帯は旗本屋敷群）、夜陰に紛れ山尾と事に及んだ。博文二才の事である。その前後、結構汚いやり方だったようだ。間もなく彼と山

尾は英国視察に同道し（通例の表現なら「高飛び」）、あつという間に尊攘の「攘夷論」を投げ捨てただけでなく、真逆の西洋讃美者に成り上がり（「成り下がり」）、以後は「存じ出世街道まっしぐら」と言う次第。

さて漸く昨年〇七月、その某大手書店の幕末本の並ぶ棚で、左の文章に再会した（因みに、山口香女史の全柔連に関するカフェ講演中のすぐ傍であった）。以下引用したい。

……このように安藤対馬守「信正、△」は立派な外相だったが、水戸藩尊攘派はじめ日本中の志士たちは外交に関する安藤の苦心など全然分からなかった。彼らに分かったのは、安藤が皇女和宮を無理やり関東にお連れして將軍の御台所にしたこと、孝明天皇を廃しようとするんだという噂だけだった。後者はまったくの風聞であつて、安藤は国学者塙次郎（塙保己一の子）や前田夏蔭に、外国人待遇の古来からの礼式などを調べるよう命じただけなのである。しかし尊攘の志士の中の悪辣な者たちは幕府の役人たちを憎悪の的にするためなどのような陰謀や中傷でもでっちあげたし、一般の志士たちも幕府の悪口なら軽々しく信じた。だから安藤は廢帝を企んだことにされたのである。なお、これは少し先の話であるが国学者塙次郎は文久二「一八六二、△」年一二月に九段坂で暗殺

された。犯人は長州藩士の伊藤俊輔（博文、後の総理大臣）と山尾庸三（この間もなく英国に密航し、明治期に工部省に入つて工部大学校「後の東大工学部」を作った）と言われている。……（以上＊文献Gより。△は引用者補記）

さてその時期の諸般を推測するに、当時の風潮として、暗殺は二本差しの間では日常茶飯事で（「幕末維新」の「暗殺一覧」、＊文献H）、伊藤のような遠国の下級武士は、騒ぎの一つや二つを起こさないと仲間内では認められなかった、などという位置取りが見え隠れする。また塙忠宝・和学講談所への幕府当局からの下問は、これは保己一の時代から引き継いだ業務であつて、《講談所》にはそれまでもしつかりした各種の実績もあつた（＊文献A、F）。仮にも発議／発案者ではない忠宝の資料調べには、何の咎もないはずである（同右＊二種）。平成の現在も、永田町国立国会図書館内に、館長すらその内容を知らない覆面調査「流石に覆面ではないが。ウー」メンが、一桁の人数ながら在勤しているところ。しかし右の事情はその時期の尊攘派の先輩には、分からなかったであろう。

また塙忠宝の子息・忠韶（タダツグ、注二、＊文献A）が明治になつてから中央官庁に奉職し、相当の出世をしたのは、政府高官になつていた伊藤が陰で口を利いたのではないかという

憶測（司馬遼太郎による？）とか、神奈川県・金沢文庫がその創設以前、近くに避暑に来ていた伊藤に古文書類を見せてその来し方・行く末を伺ったところ、是非、「古」文書館／資料館を創る事を奨められたという話し（過年図書館サポートフォーラム見学の説明）が、その周辺で見聞きされた。また伊藤の晩年には一般の噂にも流布していたとか（＊文献F）、塙家系の誰かが（仇討ち禁止令が一八七三／明治〇六年に出ていたが）、伊藤の周辺を内偵していた事など、然るべき方から伺つた。

ところで、伊藤博文等による塙忠宝暗殺の記事や話しが、これだけの古新の諸所から出てくるからには、当然一般の『人物系諸事典』にも出ていはずと思ひ、＊文献Iをメモした。伊藤博文見出し内には右のテロの記述は無かつた。つまり、戦後ではなく、明治の元勳像がいまだに幅を効かせていた昭和戦前期に、既に一部の人々の間では既知の事実だつたことが窺われる（＊N文献、追記）。

しかしこの採録時に筆者は、前のめりが昂じて復刻という表記から、戦後の復刻とは示さず、初版の出版年そのものを一九三八／昭和一三年と記してしまい、ほかの書誌事項もそのまま、塙忠宝記述の出典として記してしまつた（＊文献I）。文献・書誌を仕事にする身としては、お馬鹿丸出しの手抜きであつた。

ところで今年、二〇一四／平成二六年春の小保方問題が起こった。何やら彼女のかつての論文まで再審査すべきだ等という話しになっている。筆者としても（決して単純な比較にはならないが）一〇年前の論文について、全文につき重箱の隅々的には、一点一画的には、首は真つ白とは言えたものではない。最後の一線は断じて越えなかった自負は当然あるにしても。

それ故、小保方問題の後すぐに、慌てて*文献Iの初版本を確認し、次の諸点で拙記述上の未熟さを突きつけられた（*文献J参照）。

先ず1・ヘッディング内の生没年の表記が異なり、当時の皇紀年での生没表記であった。2・執筆者の姓名も調べれば分かったはず。3・何と『書名』ですら、復刻時の『新書名』とは異なっていた。4・掲出頁も異なる。つまり、前者*文献Iのデータ表記は、この僅か数点からだけでも現物からの採録でない事が即座に露見するという、と逃げられない場面となった。人名見出しと本文とは、辛うじてそのままだったが。

更に一年早い出版物も確認した（*文献K）。しかし平凡社版（*文献I）に比べ明治から増改訂が続いたこの*文献Kの『辞書』は、例えば伊藤博文の項（第一巻、二七二頁）では、平成の現代から見ると、偉人伝・英雄伝の類、でなければ寺社・奥の院に祀ってしまったの描

写に終始する。しかも漢文調で滔々と続く。無論塙忠宝惨殺という事など寸分も書かれてはいない。この暗殺者伊藤博文という事では、昭和後期なっても同じであった（*文献M）。

以上を要するに、調査を事とする者はすべからず、原出典そのものを現認し採録すべき事（ごく最近では古書はデジタル化されてしまい、手に触れては今は後は難しくなるが）、細部まで確認する事、無論周辺へも目配りする事、点検を怠るな、等という縮まらぬ、しかし古くからの手法の確固たる調査法に行き着いた。小保方事件後の小生的な矯正法「襟を正すべき」は自らである、というお粗末な仕儀であった。

またこの調査で分かった事では、右のような通例の『人物系事典』などでは、江戸後期の公的な研究機関、学術組織の運営を担った塙忠宝の、約四〇年間にわたる多種の活動は、項目内本文の四分の一でしか説明されていない、という事である。伊藤による蛮行（＝塙の非業の死）前後の説明の方が四三分を占める。TVワイドショウ的には面白がるのが、まるで正文である。伊藤の項内での細大漏らさぬ「こ」業績の列記・洪水に比べて、でもある。それは未確認情報を妄信し、事を起こし、無言を決め込み、逃げ切りを計り、生涯自ら改悛の念を公に示さなかった（真に松陰出来損ないの弟子）伊藤の

項目でこそ、悪行として記されるべきである（*N文献、追記）。塙忠宝の項目での内容は、調査マンとしては慚愧に耐えない（*文献I）。漸く*文献Lにおいて三分の一になったに過ぎない。塙の項目ならば、生前の公私にわたる活動内容こそ重要で記述されるべき事は、論を待たない。これはその後の事歴研究、小伝、論評文でも同様である（*文献E、F、特にA）。

更に書き加えねばならぬ事は、日本の戦後期、世界に生まれ変わったとする昭和後半期に於いて、欧米にも押（推）し出して行ける程の『日本人物事典』の大巻群は未だ刊行されていない。各層・各人への調査研究や資料発掘がなされ、新機軸の領域別・人名事典類が続々刊行され、標準化／平準化の意識・表記法も確立し、戦後も七〇年に迫ろうというこの時期に於いても、である。復刻版や記事索引・文献目録類でお茶を濁すのであろうか。これほど残念な事はない。昭和／平成期の出版界の意欲は奈辺にあったのだろうか。我が調査の日々、欧米の大人名事典の多巻群、等々を横目で睨み、平たく我が国の出版状況を棚読みして後、この事は奇妙な驚きであった。

筆者が邪推するに、旧華族や旧軍人、刑事事件の面々、或いは堀の中から出て来た人々の取り扱いの為であろうか。つまり、事典類への起筆に際しては、先の伊藤記述文の様な、ハイア

ラーキー許容的な意識・記述法（持ち上げ描写法、神棚にお飾りしての）は、無いに越したことはない。幕末の志士とか、明治の元勳等という用語は、平成期にはモウ勘弁して貰いたい。混沌と変転の現世・浮世ではあるものの、特に有名人の生前の愚挙・愚行を過不足無く記述する事も、史書や定本たる事典群のまっとうな役割である、はずである。

最後に拙文の内容はさて置き、蛇足となるやと思うが、先の*文献Fで小野は、塙の墓前祭に先立って渋沢栄一翁の諸家への説得を紹介し、式後彼の発起人挨拶文を綴り、真犯人公開を特筆と記している。真に渋沢翁の挨拶文の中に、耐えるべき、超えるべき「恩怨」を想うのである。

.....

▲注一、塙忠宝、生没一八〇七／文化〇四年二月／一八六二／文久〇二年二月、通称次郎、温故堂。江戸後期、塙保己一（一七四六／一八二一／延享〇三／文政〇四年）の創設した《和学講談所》を子息忠宝が一八二二／文政〇五年継承し、保己一以後の「続・群書類従」への原典発掘、資料類校合、同収集、蔵本化計画に従事していた（幕府の支援を受けて。上部組織は《昌平坂学問所》林家）。『続・』は明治

になって、民間組織で本格的に刊行された。

▲注二、塙忠韶、生没一八三二／一九一八年／天保〇三／大正〇七年。*文献A参照。

▲注三、朝岡興禎（アサオカ・オキサダ、生没一八〇〇／一八五六／寛政一二年／安政〇三年。奥絵師・狩野派木挽町家出身、長じて旗本・朝岡家に養子、江戸城小納戸役。後年「古画備考」を編纂。*文献B参照。

▲注四、前田夏蔭（マエダ・ナツカゲ、生没一七九三／一八六四／寛政〇四年／元治〇一年）。国学者、幕臣。水戸徳川家でも講じ、「蝦夷志料」の編纂に従事。徳川慶喜、朝岡興禎の歌道の師匠。左記*文献C。Dに八首の掲出がある。

.....

*A文献、『和学講談所御用留』の研究」斎藤政雄著、国書刊行会、一九九八／平成一〇年〇一月、1575、1580、1583。

△内容：旧《和学講談所》の業務日誌、同解説・年譜・索引。著者斎藤は*文献E、F掲載誌の「温故学会」（塙保己一記念会、JR渋谷駅近在）の会長を永く務めた。

*B文献、朝岡興禎小伝（『古画備考』編纂者、〔以下略〕、恵光院白著、

「アート・ドキュメンテーション研究」ア

「ドキュ」研究会刊No. 12（2005／H17.03）P. 51、△注、右研究会は同年／学会と改称。

*C文献、前田夏蔭『国書人名辞典第四巻』市古貞次・他編 岩波書店 一九九八／平成一〇年、三五八ページ

*D文献、「大江戸倭歌集」『新編国歌大観第六巻私撰集編Ⅱ歌集』谷山茂、他編 角川書店 一九八八／昭和六三年の部「一八六〇／安政〇七年刊」890、929、970頁

*E文献、塙次郎（忠宝）小伝、斎藤政雄著「温故叢誌」誌温故学会刊第二十七号（一九七三／昭和四八年一月）〇九、二二頁

*F文献、塙次郎忠宝と廃帝論、小野重信著「温故叢誌」誌温故学会刊第三四号（一九八〇／昭和五五年一月）、二七、三六頁（注「古文幻想」第二号（一九八〇／昭和五五年）からの転載）

*G引用出典、『幕末の魁、維新の殿―徳川斉昭の攘夷―』小野寺龍太著

福岡 弦書房 二〇一二／平成二四年〇八月。一四一／一四二ページ、【第三章桜田門外の変と坂下門外の変、【第四節】欄】

*H文献、文久2年12月21日（63・2・9）塙次郎忠瑤「ママ」（幕臣）釣洋一記

『幕末維新史事典』神谷次郎、他編 新人物往来社 一九八三／昭和五八年〇九月、一三七ページ、【暗殺一覧、一三一～一五六ページ】、の章 釣洋一編、注・見出し(63)は西暦補記か。

* I 文献、ハナワタダトミ 埴忠寶(一八〇七～一八六二)、『日本人名大事典第五卷』平凡社 一九七九／昭和五四年。一五一ページ

注、一九三八／昭和一三年 * J の復刻版

* J 文献、ハナワタダトミ 埴忠寶「皇紀」二四六七～二五二二)の項、石村貞吉・記、

『新撰 大人名辞典第五卷』平凡社 一九三八／昭和一三年〇三月、一四七～ページ

* K 文献、ハナハジラウ 埴次郎『新訂版大日本人名辞書第三卷』大日本人名辞書刊行会 一九三七／昭和一二年〇四月(増訂一版)二一〇七頁、注：伊藤による暗殺の記事を記載。

* L 文献、ハナナタトミ 埴忠宝一八〇七～六二 鈴木淳記『国史大辞典第一卷』吉川弘文館 一九九〇／平成〇二年〇九月、六四七頁。

(注、ウイキペディアは未調査)。

* M 文献、イトウヒロフミ 伊藤博文 安井達弥記 右 L 項に同じ『第一卷』一九七九／昭和五四年〇三月、七〇八頁

* N 文献、文久二年十二月二十一日の項『近代政治関係者年譜総覧 第一卷 戦前篇 あくう』ゆまに書房 一九八九／平成〇一年一〇月 『伊藤博文公年譜』春秋公追頌会編 同会刊 一九四二／昭和十七年〇六月 610～695頁のうち、613頁



ある民俗学博物館と一本の幼木

岡田 恵子

あれは小学校五年か六年生の春だったから、

昭和三十年頃のことか。担任の先生が、一見に値する博物館を見つけたから行ってみたらと教えてくれた。それは西武線の保谷にあった。

保谷は西東京市だが、そこは駅前を離れると一面の畑が広がっていた。当時私が住んでいたのは、場末であっても繁華街もある住宅地であったから、遠足にきたような気分だった。通っていたのは北区立の小学校だったが、よい先生方がおられたと、今更ながら感謝である。

はじめから横道にそれてしまうが、その小学校では高学年になると、芸術の授業は専門の先生が教えていた。音楽の先生からは、放課後の教室で特別にピアノの手ほどきを受けることができた。三年のときの音楽好きの担任の先生の計らいで、こちらからお願いしたわけではない。戦後のこと故、家にはオルガンさえなく、ピアノのレッスンなど夢のような境遇にあった。(ちなみに、姉は紙で作った実物大の鍵盤

に両手を躍らせて、よく歌っていた。)

図工の先生は、日本初公開のループル美術館展を見に行くよう勧めてくれた。授業でループル美術館の由来を語り、いかにその所蔵品が優れたものかを熱っぽく説かれて、これは見に行かねばという気持ちになった。そこで、級友と前売り券を買いに上野の国立博物館を訪れた。なぜか博物館は静まり返っていた。横手に回って勇気を出して事務所の戸を開け、おずおずと用件を伝えると、男の方が机の引き出しから二枚のチケットを出してくれたのを覚えてい

る。さて、保谷の博物館の話に戻るが、春休みだったか、先生の助言もあってお弁当持参で数人のクラスメートと出かけた。駅からだいぶ歩いたところに、これが博物館かと思われるおんぼろの木造の建物があった。上野の博物館とは大違いであった。入ってみると、若い女の先生風の方(研究者だったに違いない)が出て見えて、
「あなたたちだけで来たの？」

とびっくりされた。あとで知ったが、その日の来館者は私たちだけだったようだ。一人も来ない日もあるそうだ。喜んでくださったわけだ。

そのとき運動靴を履いていたのか、上履きのスリッパだったかは忘れたが、そうつと歩いているにも関わらず、木の床がギシギシときしんだ。雨漏りもあったようだ。先生は私たちに終始付き添って展示物を丁寧に説明してくださった。そんなにお客さま扱いしてもらうとはと、子どもごろころに恐縮しながら見て回った。残念なことに、何が展示されていたか、今はまるで覚えていないが、日本のものだけではなかった気がする。

見学が終わると、なんと今度は映画を見せてくれるという。白黒のその短編映画は衝撃的だった。アフリカかニューギニアの奥地かの少数民族のドキュメンタリーだった。女の子は一〇歳ぐらいで結婚し、妊娠する。その後ほとんど子供を生むので乳房はかなり垂れ下がり、裸のまま背中におんぶした赤子にその乳房をひょいと肩越しに投げて吸わせるのである。当時の私にはショッキングで、いまだに忘れることができない。

さて、退館時にお弁当を持ってきたことを告げると、それではほかばか陽気だからと、前の庭にござを持って来てくれた。堀もない敷地の周りは春の野草や緑に囲まれていた。やかん

に沸かしたお茶の差し入れを受けながらのピクニック。

「先週は三十人も見学者があつてたいへんだつたのよ」

と先生はうれしそうに語る。芋を洗うような大混雑のループル展を体験した後のこと、わがクラスだって五十人はいる。わずか三十人で？という内心驚きの数字が頭に焼き付いてしまった。

そのあとは、付近の田園地帯の探索に出た。近くにあつた竹藪に分け入ると、藪の中にすくと立つ一本の植物があつた。これは草ではない、と思つてひっぱると簡単に抜けた。家に持ち帰つて植えてみようと思ふと、

「これが竹藪に生えていたの？」

と驚きながら、先生はなんとそれは丁寧に、根に少しの土と水をふくませて新聞紙でくるみ、しっかりと縛つてくれた。至れり尽くせりとはこのことよ。このように深く記憶に刻まれたのは、あたたかく迎えて面倒をみてくださった、あの学芸員のおかげと思つている。先生はその後どうされたかと、思い出すたびに氣にかかる。

後日談。ひよろつとしたその幼木は、秋になるとコスモスが乱れ咲く我が家の庭で、たくましく成長した。晩秋には紅葉するばかりか、かわいい橙色の実をはじかせた。近所では見か

けない優雅な木であつた。なんの木かと思いつつ、図鑑を調べることもなく時が過ぎた。

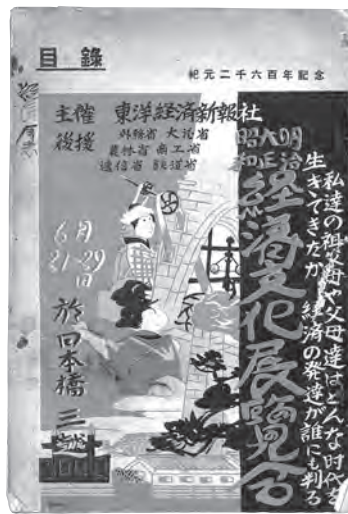
一〇年も経つたころか、我が家で購読していた雑誌「太陽」に載つた、万葉の植物という特集に、素敵な絵のページがあつて、それが、まゆみだと思つた。まゆみの木は、庭に新しい家を建てたときに塀の際に移されていたが、その後も枝を広げ、半分以上が塀越しの路地に出て日陰を作つた。近所の子どもたちがその下で遊んだ。しかし昨年、大木となつたその木に虫が巣食つたとかで、ついに切り倒されてしまった。樹齢六〇年であつたか。

一方、あの民俗学博物館はその後どうなったのだろうか、かねがね思つていた。数年前、ある席でふとその話をしたところ、洪沢史料館にお勤めの小出さんが教えてくださった。それは洪沢敬三が開設した民俗学博物館で、後には国立民族学博物館収蔵資料の母体となつたとのこと。それを聞いて安堵した。思い出の博物館の品々が、そっくり国の管理となつたことに。

それにしても民博を見学したことがあるというのに、なんとなくかつたことか。もつともこのように昔をなつかしく思い出すのは、近年のことなのかもしれない。ウィキペディアで一九三七年創立だつたことを知つたが、ネット上の「洪沢敬三アーカイヴ」には、氏のくわしい年譜も載つていた。小出さんありがとう。

展覧会目録から来日人名を知る

国立の行きつけの古書店で、カウンターそばの山積み of 書籍の中に、ひょいと目を引くものがありました。すこし傷んだ展覧会目録でした。



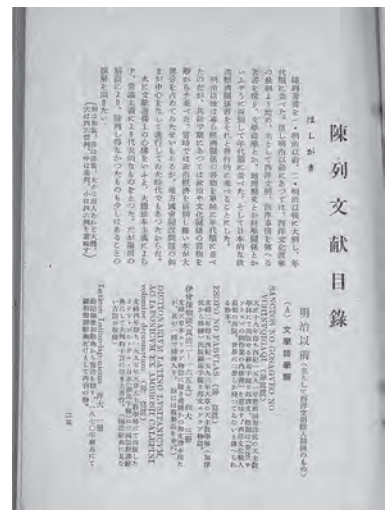
東洋経済新報社が主催、外務省・大蔵省・農林省・商工省・逓信省・鉄道省が後援、会場は日本橋の三越、会期は昭和15年6月21～29日。紀元二千六百年記念『明治・大正・昭和経済文化展覧会目録』（昭和15年）です。

金沢 幾子



目次を見ますと、「錦絵・地図・版画目録」「黒船館彼理文庫出品目録」「陳列文献目録」「図表目録」「実物参考品・其他出品目録」「戦時体制下の重要工業」「世界最高水準を行く科学的自動計理機」「経済文化貢献者略記」「明治経済文化関係欧米人出品目録」「明治経済文化関係欧米人一覧」「明治・大正・昭和経済略年表」「附・明治前西洋交渉略年表」と盛りだくさん、図版のほか、解説も付き、お買い得と判断しました。

陳列文献目録

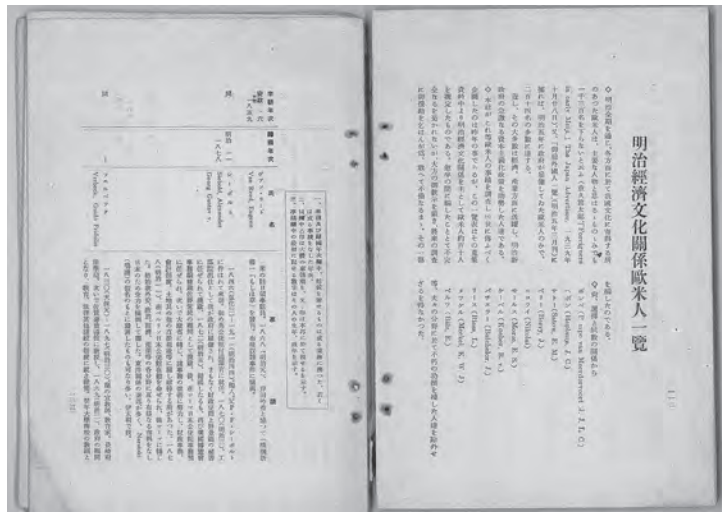


開催の趣旨は、「経済」は社会生活の「基礎」をなすもの、国民大衆と共に「経済」の過去における業績を回想し、かつ目下の焦眉的重大性（日本では東亜新秩序の建設に邁進し、欧州では世界大戦争が発展拡大しつつある）を、正しく認識把握して、苟くも過誤違算なからしめん、ということでしょうか、社主・湛山の心意が感じられるようです。

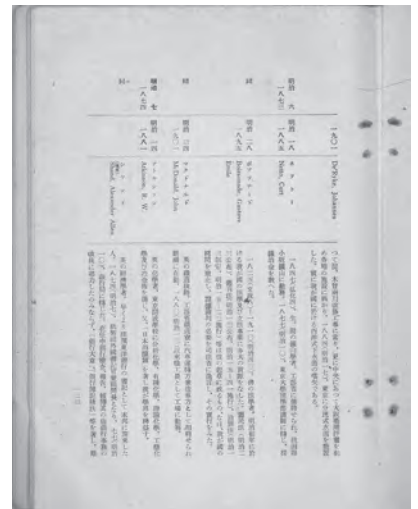
編纂委員は会長に石橋湛山、委員に土屋喬雄、加田哲二、清澤淵、築比地仲助、竹森一則、事務長に小熊孝、助言および製作援助者には小林輝次、福澤一郎、脇村義太郎。

出品者には石井研堂、長谷川如是閑、尾佐竹猛、渡邊幾治郎、野村兼太郎、遠藤佐々喜、三井高陽、三井高維、洪澤敬三、樋畑雪湖、その他。幕末の近代産業黎明期より昭和15年までを8

区分し、日清戦役前後を第一次産業飛躍期（産業資本成立期）、日露戦役前後を第二次産業飛躍期（同発展期）、欧州大戦前後を第三次産業飛躍期（金融資本確立期）などと位置づけ、展示しています。



この展覧会目録によれば、明治全期を通して各方面において我が国の文化に寄与した欧米人は、主要な人物でも1,300名をくだらず（重久篤太郎「Foreigners in early Meiji」The



Japan Advertiser, 1939.10.28）、また明治5年に政府が雇用していた欧米人のみで214名に達する（『御雇外国人一覧』明治5年3月刊）そうですが、「明治経済文化関係欧米人一覧」はそのうちの約110名を選定し、来朝年次、帰国年次、氏名（カタカナと原綴）、事蹟について編纂、ただ、選択と紙数の関係からボンベ、ヘボン、サトー、ベリー、ニコライ、モールス、ケーベル、バチエラー、リース、メツケル、ベルツ等を除外したとあります。

珍しいものを手にしたので、武内博編著『来日西洋人名事典 増補改訂普及版』（日外アソシエーツ1995年1月刊）に、これらの人物がどの程度収録されているか、チェックしてみました。「明治経済文化関係欧米人出品目録」と「明治経済文化関係欧米人一覧」が対象です。

短期間の調べで、ミスやものも多く、再調査が必要と思いますが、『来日西洋人名事典 増補改訂普及版』（以下『事典』）に掲載されていない人物に、ある特色がでていることがわかりました。

主な一つは、技師が多いこと。なかでもイギリスの鉄道技師のパーセンテージが高く、ほかに造船関係者、ドイツからは印刷技術者、製靴技術者、オーストリアからは蹄鉄師も来日しています。

もう一つは、地方で活躍した人物であること、鹿児島藩、紀州藩、大坂、神戸、北海道の地名が出てきます。

職業としては、新聞記者（イギリス、ポルトガル）、森林学者、地質学者、鉱山学者、農学者、法学者、経済学者、軍人ほか。たとえば、官立大学ではなく、ドイツ学協会学校の専修科教師を務めた経済学者を採り上げているなどは、東洋経済新報社ならではの目配りのような気がします。

私がたずさわっている福田徳三の関係者としては、ラートゲン、グリフィン、ブロックホイス、ウエンチヒが掲載されています。明治37年に箱根で夭折したグリフィンに、福田は「読売新聞」に哀悼文を寄せました。ウエンチヒ（『事典』掲載なし）については、その経済学教授法

改良意見を全面支持し、高野岩三郎がそれを取り入れながら東京帝国大学に経済学部を設立するのを援護しています。明治40年に、恩師ブレンターノ博士の書簡を福田の自宅まで届けてくれたモントグラス伯爵の名があればよいがと思いましたが、残念ながら、この展覧会目録にも、『事典』にも出てきませんでした。

誤りと思われるものに、『事典』には載っていない Rudolf Otto の展覧会目録上の経歴は、『事典』の Rudolph Carl のそれと合致します。別人なのですが、一部で同一人物として扱われていたという例がここにも出ているようです。

ちなみに、現時点で、この目録は、国立国会図書館をはじめ、東大、一橋大、東北大、京大、名大、阪市大など31の大学図書館・研究機関に所蔵されています。

調査の一部の再確認にあたっては、一橋大学附属図書館研究開発室の福田名津子さんにお世話になりました。



人名		出品物	一覧 記事有	来日西洋人名事典
Aldrich, A.S.	オールドリッチ	○	○	X
Antisel, Thomas	アンチセル		○	X
Appert, George	アッペール		○	○ アペール
Atkinson, R.W.	アトキンソン		○	○
Ayrton, William Edward	エルトン		○	○ エアトン
Bahlsen, Emile	バールゼン		○	○ バールセン
Black, John R.	ブラック		○	○
Blake, William P.	ブレーク		○	○
Blakiston, Thomas Wright	ブラキストン		○	○
Blockhuys, Edward Joseph	ブロックホイス	○	○	○
Boisonade, Gustave Emile	ボアソナード	○	○	○
Boyle, Richard Vicars	ボイル		○	○
Branton, Henry	ブラントン		○	X
Bridel, Louis	ブリデル		○	○
Brinkley, Frank	ブリンクリ		○	○ 名:Francis
Brown, A.R.	ブラウン		○	○ AlbertRichard
Bruech, Karl Anton	ブリュック		○	X
Brunat, Paul	ブリュナ	○	○	○ ブリューナ
Burton, William	バートン		○	○ バルトン
Capron, Horace	ケプロン	○	○	○
Cargill, W.W.	カーギル		○	X
	チャイルズ(精油技師)		○	X
	チボシー(仏技師)		○	X
Chiossone, Edoardo	キヨソネ	○	○	○
Christy, F.C.	クリスティー		○	X
Clarke, William S.	クラーク	○		○
Coignet, Francois	コワニー		○	○ コワニエ
Condor, Josiah	コンドル	○	○	○
Dan, Edwin	ダン	○	○	X
De Bousquet	ジュ・ブスケ		○	X
De'Ryke, Johannes	デレーキ		○	○
Divers, Edward	ダイヴァース		○	○
Doederlein, Ludwig	デューデルライン		○	○
Droppers	ドロップース		○	○
Dury, Leom	ジュリー		○	○ デュリー
Dyer, Henry	ダイヤ		○	X
Eggert, Udo	エッゲルト	○	○	○
Ende, Hermann	エンデ		○	○
Engalnd, John	イングランド		○	○
Exner, Heinrich Ottomal	エクスネル		○	X
Eykman, E.F.	アイクマン		○	○ エイクマン

Fenollosa, Ernest	フェノロサ	○	○	○	
Fesca, Max	フェスカ	○	○	○	
Foxwell, Ernst	フォクスウエル		○	○	
Galway, W.	ゴールウェー		○	X	
Grasmann, Eustach	グラスマン		○	X	
Gratama, Koenraad Wolter	ハラタマ	○	○	○	
Greeven	グレーフェン		○	X	
Griffin, Charles Summer	グリフィン		○	○	
Hansard, A.W.	ハンサード		○	X	
	ハース（鑿井技師）	○	○	○	Haas, Hans
Hefele, K.	ヘーフェレー		○	○	ヘーフェル
Heitkenper, Fredelick	ハイトケンペル		○	X	
Hilgendorf, Franz	ヒルゲンドルフ		○	○	
Hofmann, Amurigo	ホフマン		○	X	
	ヒヤツ（蘭化学）		○	X	
	イ・ホーム（英技師）		○	X	
Janes, L.L	ジェーンズ		○	○	
Janson, J.L.	ヤンソン		○	○	
Kellner, Oskar	ケルネル	○	○	○	
	キンチ		○	○	Kinch, Edward
Kinder, Thomas W.	キンドル	○	○	○	
Knipping, E.	クニッピング		○	○	
Koeppen, Karl	ケッペン（カッペン）		○	X	
Langgard	ランガルト		○	○	名: Alexander
Learned, Dwight Whitney	ラーネッド		○	○	
Liebers, Bruno	リーベルス		○	X	
Loenholm, L.S.	レーンホルム		○	○	LudwigHerman
Loew, Oscar	ロイーブ		○	○	
Lubowsky	ルボフスキ		○	○	ルボフスキー
Lyman, Benjamin Smith	ライマン	○	○	X	
McDonald, John	マクドナルド		○	○	
Maillot	マイヨ		○	○	Maillot, H.X.
Mayer, Heinrich	マイエル		○	X	
Mayet, Paul	マイエット	○	○	○	
Meik, C.S.	ミーク		○	○	メーク
Morell, Edmond	モレル	○	○	X	
Mosse, Albert	モッセ		○	○	
Mueller, Albert	ミュルレル		○	X	
Mulder, R.	ムルドル		○	○	
Netto, Curt	ネッター		○	○	
Page, W.F.	ページ		○	X	
Palmer, H.Spencer	パーマ		○	○	Henry
Parvis, Frank P.	パーヴィス		○	X	

Pawnell, C.A.W.	パウネル		○	X
Punpelly, Raphael	パンペリー		○	○
Rathgen, Karl	ラートゲン	○	○	○
Revilliod, August	ルビリョウ		○	○ ルヴィーヨー
Revon, Michel	ルヴォン		○	○
Ritter, Herman	リッテル		○	○ リッター
Roesler, Karl Friedrich Herman	レスレス (ロエスレル)	○	○	○ ロエスレル
Rosa, Da	ローザ		○	X
Rudorff, Otto	ルドルフ		○	X
Schenk, Carl	シェンク		○	X
Shand, AlexanderAllen	シャンド	○	○	○
Shann, Theodore	シャン		○	○
Siebold, Alexander George G.v.	シーボルト	○	○	○
Smith, Robert Henry	スミス		○	X
Smith, W.M.	スミス		○	X
Sprague, O.M.W.	スプレーグ		○	○
Stone, William Henry	ストーン	○	○	○
Thompson, David	タムソン		○	○
Trevithick, F.H.	トレヴィシック		○	X
VanDoorn	ファン・ドールン		○	○ フルネーム
VanGhent, J.G.	ヴァン・ゲント		○	○ フルネーム
VanReed, Eugene	ヴァン・リード		○	○ フルネーム
Verbeck, Guido Fridolin	ヴェルベック		○	○ ヴァーベック
Verny, FrancoisL.	ヴェルニー	○	○	○ フルネーム
Vickers	ヴィッカーズ		○	○ フルネーム
Waentig, Heinrich	ウェンチヒ		○	X
Wagner, Gottfried	ワグネル	○	○	○
Wenckstern, Adolphv.	ウェンクステルン		○	○ ウェンクシュテルン
Wernick, Johannes	ウェルニック			X
West, Charles Dickinson	ウェスト		○	X
Williams, G.B.	ウィリアムズ		○	○ ウィリアムズ
* ウムラウトはeを入れて表記 ○は掲載、Xは未掲載				

日本病院患者図書館協会創立40周年を振り返って

菊池 佑

〈はじめに〉

患者図書館の普及のための活動が40周年を迎えたが、この機会に節目となった出来事を時系列で紹介したいと思う。

1960年代の図書館の世界で未開拓の分野は患者図書館であり図書館員でも知る人は稀であった。当時の日本では実態が乏しく文献も散見する程度であり、英米の文献を渉猟し読後の結論は「この種の図書館は日本でも必要であり将来必ず医療サービスの重要な一つになる」という事であった。さらに、患者図書館普及は担当者＝司書も増えることであり雇用創出にもなることだと気づいた。

1970年代

〈研究団体を設立と研究発表〉

1974年に「日本病院図書館研究会」（後に日本病院患者図書館協会に改称）設立し、最

初の仕事として日本の実態調査を実施した結果

は、（1）結核療養所の患者自治会、（2）ボランティア団体、（3）公共図書館の施設巡回サービスの1つに病院を含む、（4）病院内の医学図書館担当司書の兼務、などによる運営があることが判明し、この報告を雑誌「図書館界」に投稿した。患者図書館の実態を数量的に把握した研究論文としては日本では最初であった。

次に、海外の事情を知るために私費で1975年にアメリカの視察を皮切りにイギリス、スウェーデン、ドイツ、フランス、ポーランドに渡航し、その都度、図書館関係雑誌に報告したので、このテーマが少しずつ館界に知られるようになっていった。

〈図書館サービスから疎外されていた入院児〉

当時、図書館員たちは「いつでもどこでも読書を」とか「ポストの数だけ図書館を」などのスローガンを掲げていたが、全国の小児病棟は

まさに「読書（児童図書館サービス）」が欠落していた。そこでパイオニアの気概をもって活動を開始した。

1977年に国立大蔵病院（国立成育医療センターの前身）小児病棟で「読書ボランティア活動」（本の貸出・読み聞かせ・紙芝居など）を開始。この活動は関東地方では最初の試みであった。

〈反応早い朝日新聞、行動早い地方の出版社〉
全国紙が初めて患者図書館を取り上げたのは1978年2月20日の「朝日新聞」であり、これに関心を持った地方出版社の力添えで『患者と図書館』（明窓社）が実践編と研究編の二部構成で1983年に刊行されることとなった。

1980年代

〈マスメディアの関心の高まりと報道が相次ぐ〉

朝日新聞の掲載を皮切りに1980年代から2000年代前半にかけて、患者図書館のテーマを新聞（全国紙・地方紙）・雑誌・ラジオ・テレビなどが積極的に取り上げ国民に啓発活動をしてくれ、その影響力の大きさに驚く。

〈図書館の国際会議でも患者図書館が発表討議

）

1986年8月に、国際図書館連盟（IFLA）の会議が東京の青山学院大学で開催され、分科会の中に「患者図書館」の発表と質疑応答の時間が設けられた。日本経済新聞夕刊（1986.9.10）がこの国際会議を写真付きで大きく報道した。

〈医療・看護関係雑誌も取り上げる〉

1978年12月号で雑誌「病院」（医学書院）が患者図書館の特集を初めて組んだ。その後、「ナースデータ」や「看護展望」「看護学生」など看護関係の雑誌も患者図書館を取り上げるようになり、医療界でも関心を持つ人たちが着実に増えていった。

1990年代

〈全国図書館大会で発表討議と「アピール文」の採択〉

図書館関係の雑誌や新聞などで患者図書館のテーマが取り上げられるにつれて、図書館員たちにも関心が広がり全国図書館大会で発表討議が実現し、1994年の新潟大会では「患者図書館シンポジウム」を開催し、最終日の全体会で「患者図書館アピール文」が全会一致で採択された。

2000年代

〈研究書『病院患者図書館』（出版ニュース社）の個人著作として内外の歴史や実情や今後の展望などをまとめた本が2001年に世に出た。それまでの研究と実践の集大成で後進の研究に役立つよう、参考文献（外国語を含む）を巻末に付けた。〉

〈患者図書館のガイドラインの日本語版〉

国際図書館連盟（IFLA）の中の「患者図書館ガイドライン作成委員会」の助言委員として参画し、私が日本語訳を実質的に担当し、日本図書館協会から2001年に刊行された。後述の静岡がんセンターの患者図書館創りに間に合うタイミングでの刊行であった。

〈専従司書担当の患者図書館が2002年に日本に誕生〉

静岡県立静岡がんセンターは21世紀型の病院医療サービス（患者中心）を目指し、専従司書担当の患者図書館もその構想に含まれた。

設計の段階から私が参画し、これまでの内外の患者図書館の研究成果に基づいた助言や提案の多くを反映した理想に近い患者図書館が日本に誕生し、私が専従司書として勤務する機会を与えられた。

1階の玄関付近にゆつたりとした快適な部屋（約120㎡）に、娯楽・一般教養書だけでなく医学書や雑誌、新聞、視聴覚資料を備えた患者図書館「あすなろ図書館」である。図書館コンピュータシステムで受入・登録・貸出・返却・統計などを一括処理する。病室巡回はボランティア・グループが担当にし、きめの細かい貸出サービスも構築した。

〈「Web患者図書館」の開設と公開〉

患者図書館用の健康医療情報データベースを作り全国の患者図書館司書や患者・家族のために、2004年から「Web患者図書館」をインターネット上に公開し利用に供している。

特長は、図書・新聞・雑誌を「同時検索」でき、収録するデータの多くは、患者図書館や最寄の公立図書館に所蔵する文献なので必要に応じて現物を読むことができる。

「Web患者図書館」は、ほぼすべての診療科を含む総合データベースであり、病気だけでなく隣接分野の介護についての情報も多数収録しているので公共図書館でのレファレンスにも大いに活用されるようになった。

〈患者図書館司書養成講座（図書館員のための医学講座）

受講対象を患者図書館員と公共図書館員を想

定して2004年度に開始したが、蓋を開けてみるとその後、医学図書館司書や専門図書館司書や学校司書など多方面からの参加者がある。

講師は医学概論を医師、解剖生理学を看護師、そして健康医療情報リテラシー論を私が担当している。

〈患者図書館の今後〉

インフォームド・コンセントとセカンドオピニオンが日本の医療の中では定着した今、患者も自身の病気に関する医学知識を持ち担当医との情報格差を縮めて治療に主体的にかかわる必要性が求められるようなり、患者図書館の役割も変化し医療サービスの必須の機関へと進化を見せている。

今後の課題は、患者図書館担当司書の「待遇」と「法制化」である。患者図書館司書のほとんどは非常勤待遇であることと、患者図書館の法律や規則など文書化されたものは存在しないため病院間の格差が大きい。厚生労働省が患者図書館の「指針」を作成すれば、それを「根拠」にして病院が患者図書館を常設できる、また文部科学省管轄の大学病院については、患者図書館を分館として位置づけて設置基準を作成してもらいたい。患者図書館が診療報酬の対象になれば運営は安定し「質」も保障される。また病院の機能を評価する「日本医療機能評価機構」

は、患者図書館の質（図書館司書・資料・図書館施設・設備の3条件）を査定してもらいたい。



「第3回日ソ青年友好祭」忘備録

平井 紀子

1967年の夏、私は26才。

この年、初めての海外旅行を体験した。

「第3回日ソ青年友好祭」という日本とソビエトの青年の交流と相互理解のために開催されている行事である。期間は8月12日から9月8日までの約1か月。開催地は、旧ソ連邦のタタール自治共和国の首都「カザン」。カザンは、モスクワから東へ800km、ボルガ河とカザン川の合流点に臨む商業都市で近代工業施設が活動している。

1957年に、日ソの国交回復となり、新しい時代に即応した国家関係が樹立された。とはいっても両国民との間は、必ずしも正常にうまくいってはいなかったようだ。日ソ交流協定を結んで、各界の人事交流をはかり、文化、学術、スポーツ、政治、一般生活のあらゆる面で、日ソ青年の交流と相互理解という目標で友好祭が開催されていた。

この友好祭は、ソビエト青年側の主催により

開催され、日本側は招待されて参加する形をとっている。事実、ソビエトに到着してから離れるまで、旅行、宿舎、食事など一切はソビエト側から無料で提供された。

友好祭には文化、学術、スポーツ、産業と多様な分野の方、200人ぐらいが参加した。日本からは、有名な女優さんや大学教授、山形の農業生産者も参加していたが、私は一般分野から加わった。

この旅行に参加しようと思ったのは、友人Y子の父親が「日ソ親善友好協会」の役員をしており、芝浦工業大学でロシアを教えていた関係で、Y子と、もう一人N子の3人で、Y子のお父さんからロシア語を学んでいた。

図書館には服飾関係のロシア語の文献も多くあり、ロシア語が出来る館員がいなかったの

で、一番若い私がやることになって始めたのだ。ロシア語はご存知のように、言語の変化が複

雑で、授業についていくのに大変であり、幾度も挫折しそうになったが、ロシア民謡を唄ったり、ロシア映画を見たりして、なだめすかされ、サークルの勉強は何とか続行できた。

世界の言語をよく知っているわけではないが、ロシア語は世界で一番といつてよい程、美しい言語だと思っている。

いざ、海外旅行をするとなると、休暇のこと、友好祭に参加する理由などの問題もあり、学内で検討されたいが、何とか認められ、休暇も特別休暇を与えられた。

ソビエトからの招待とは言え、ソビエト都市への旅行もあり、小遣は必要である。1ドル360円の時代であり、旅行の目的からも額は制限されていた。毛皮のショールがほしい、現地のお酒もほしいと、夢は膨らんでいたが、日本円で2万円までの持ち出しが許可された。

8月12日、自宅を出発、新潟で結団式を行い、14日の昼に、新潟港からナホトカに26時間の船旅であった。日本海は波荒く、舟酔いには参ってしまった。ソビエトの最初の地、ハバロフスクに到着、市内見学ののち、飛行機で目的地カザンに向かった。

8月17日、ボルガ河のスポーツ宮殿で開会式が行われた。開会式のあと、ボルガ湖畔遊覧したが、寒くてコートを持参しなかったことに後

悔した。

友好祭の中心は、開催地カザンの草原に幾つものテントを張り、キャンプ方式で行われた。実際には6日間の期間で、班別に分かれ、分科会、ゼミナール、夕方からはコンサート、映画祭など盛り沢山だった。

「カザン大学」の見学とボルガ河遊覧が印象に残っている。

グループ別の分科会では、偶然にも、私が使命され、下手なロシア語で「図書館で司書をしています」と言うと、喝采を浴びて、現地の地方新聞に私の写真が載った（写真1）。茶色に劣化してしまったが、この新聞は、宝物の一つに今も大切に保存している。

友好祭最後の日に、記念の植樹を行い、キャンプファイヤーで幕を閉じた。

友好祭の後は、班別にソビエト各地を観光した。

私たちは、ハリコフ、トビリシ、ヤルタ地方と南部の都市に行くことになった。

ハリコフは、1960年代から鉱業、商業の中心地となり、機械工作などの工業部門も発達した。ハリコフのトラクター工場は有名で、フランスなどに輸出されている。

トビリシの地名は、グルジア語のトビリ（暖かい）から取ったもので、市はクラ川の両岸に

広がっている。トビリシはソビエト政権になってから、教育文化施設が著しく増加し、学術研究機関が多く、大学の図書館も見学した。

ヤルタは、黒海に接した保養地。私たちには1945年に行われたヤルタ会談の地として記憶にある。会談が実地されたリヴァディア宮殿にも足を運んだ。

黒海に向こうはトルコ。世界がこんなに身近にあることに感動した。

9月7日、最後はモスクワを経由して、ナホトカに戻った。

旅での食事は、何の違和感もなく美味しく頂けた。

チビだった私（子供と思われたのかもしれない）は、外国人は優しく擁護してくれた。

夢のような旅だった。

今回は、希望するレニングラードには行けなかったが、個人で絶対来ようと3人で固い約束をした。

後日談になるが、この日ソ青年のキャンプでは、様々な情報を耳にしたが、なかでも驚いたのは、数人の混血児が誕生していた、ということだ。日本人とソビエトの方のテントとは、勿論、別々であったが、夜の広い草原では人生模様が繰り広げられていたのであろう。



写真1：ウチヤマノリコ（内山紀子：旧姓）家政系大学図書館司書（東京）

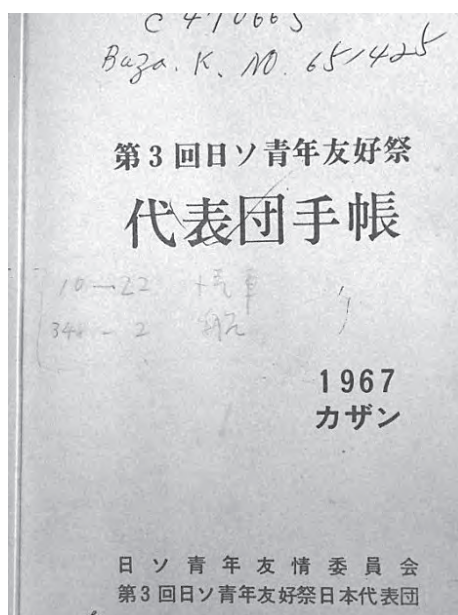


写真2：第3回日ソ青年友好祭
代表団手帳



写真3：掲載された現地地方紙「コムソモーレツ タターリン №100号（1967年8月20日）

『私が出合った人・本・山 あるライブラリアンのあゆみ』出版始末記

平川 千宏

昨秋、日外アソシエーツ社から、販売用にも少数数刷られたが、ほぼ自費出版のかたちで標記の本を出してもらった。これまで書いたものを集め、書いてないことは改めて書いて一冊にした。新たに書いた部分は、全体の三分の一ぐらいだろうか。

内容は、テーマ別に八つのグループに分けた。図書館職員養成所時代から国立国会図書館・山梨英和短大勤務時代までのこと、活動にかかわった「図全協」・「図書館フォーラム」などのこと、新聞切り抜きや書誌づくりのこと、住民図書館をはじめとする市民運動・住民運動資料関係のこと、学生・職員の人権問題や憲法問題、私が直接・間接に影響をうけたり親しくしてもらった人たちのこと、最後は趣味の山歩きのことなどである。

自分がやってきたことや、考えてきたことが中心なので、全体として自分史に近いものになったといっているだろうか。

早ければ図書館退職時の六〇歳ぐらいで、遅くても七〇歳ぐらいでまとめておくべきものだったと思うが、生来のスローモードで、八〇歳直前になってしまった。

ただ、そのために、比較的最近のことまで盛り込むことができたことと、いわば長い間温めてきたので、言いたいこと、書きたいことはほぼ書くことができたと思っている。

本は、三百人ほどの先輩・知己に送った。多くの人から、電話、メール、手紙でお礼と感想が寄せられた。それらは過褒の気味があり、少し割引いて考えなければならぬと思うが、大方、好評裡に迎えられたと言っているかと思う。それらは私信なので、本来公表すべきものではないのだが、少数数、冊子にまとめて、出版記念会に出席してくれた人などに配った。

本には、四〇年も五〇年も前に書いた文章もいくつか載せたので、感想のなかには、古いもの

をよくちゃんと残しているという人が、何人かいた。

私は、他のものでも、概して物持ちがいい（物が捨てられない？）ほうである。そのことと、小さい時から作文は好きだったので、人さまの評価はともかくとして、自分の書いた文章には、それなりの愛着を持っていた。それで、書いたものは全部手元に持っていた。

感想のなかで、何人かの人が「さわやかな読後感を持った」と言ってくれたのは、うれしかった。また、深井人詩さんが、平川さんの文章には文体があると言ってくれたのは、かねてから文章（論）や文体（論）に関心を持ってきた者として、大変うれしかった。

二人の娘にも感想を書いてもらったが、長女は、この本で、お父さんのやってきたことがよく分かったと言ってくれた。次女も、そのことは書いてないが同じだろう。大体父親などというものは（母親も？）、自分のやっていることとか、やってきたことなどを、子どもに普段あまり話したりしないものだろう。私も例外ではなかったのだ、今度の本で、そういうことを伝えることができたのはよかったと思う。

今度の本の特徴の一つとして、巻末に人名索引を付けたことがあげられるだろう。学術書や全集・著作集などにはあることだが、この種の

本としては珍しいことだと思う。

人名索引を載せた意図としては、私がその著書を愛読したり、親しくしてもらった人の名を、感謝の意味をこめてあげておきたかったということがある。また、さまざまな活動をともした人たちが大勢いるが、その人たちは、そのことを必ずしも記録として残していないので、そのことを記録にとどめておきたいという思いもあった（余計なお世話だという人がいるかもしれない）。

人名索引を付けた意図はそういうことだったので、そこには私が好意を持っている人だけをとりあげ、文中で批判の対象にした人——例えば佐藤栄作、安倍晋三といった人たちの名はとりあげたくなかった。事実、とりあげていない。

そこで、当初、索引の注記に、「批判の対象にした人物は除いた」と書くとした。しかし、実際に作業してみると、批判の対象にした人以外にも、必ずしも索引にとりあげる必要のない人名があることが分かった。そこで、先のような注記を付けると、本文中に名前が出ていて索引にその名がない人は、すべて「批判の対象にした人」ととられかねないので、その注記を付けることはやめた。

この索引で、問題があるとすれば、次のようなことである。索引に名が出ていないか、また出ている場合も何度でてくるか（索引

の人名のあとに、本文中に出てくる頁を示しているの、本文中に何度出てくるかが分かる）は、私が人から影響を受けたり、親しくしてもらったりした度合いを、かなりよく反映していると思うが、完全に反映してはいない。

かなり親しくしてもらった人でも、本文中に名前が出てこないの、索引にも名が出てこない人がいる。出てくる回数についても、同じようなことが言える。

著名人について言えば、例えば、私は日本の近代詩も割とよく読んできたが、この本のなかで詩人で名前が出てくるのは、高村光太郎が二回、あとは伊東静雄、中野重治、三好達治が一回ずつである。これだけで見れば、高村光太郎を一番よく読んできたように取られるかもしれないが、必ずしもそうではない。光太郎の詩にももちろん好きな詩があるが、全体として好きな詩が多いのは、伊東静雄、中原中也、中野重治、三好達治・・・といった人たちのものである。この本では（したがって索引にも）、伊東、中野、三好は一回ずつ出てくるが、中原中也は出てこない。

まあ、そんな難点はあるが、先に述べたような意図からして、人名索引を付けたことは、総体としてよかったのではないかと考えている。

そして、カール・マルクスは索引にとりそこなかったが、坂本竜馬から羽仁五郎、王貞治、渥

美清から当時二歳のが家の孫娘まで、有名・無名の人たちの名が、五〇音順に混然と並んでいるのを眺めるのは、なかなか楽しいものがある。

こんなふうに、自分自身の好みを出して本がつくれたのも、自費出版であればこそと言えるかもしれない。

いま図書館で図書館員として働くことの困難

逃げおおせられたからって、それでよいとは言えないし

水谷 長志

この図書館サポートフォーラムの幹事、会員は、どちらかというとかつて図書館に働き、かつての図書館の「栄光」？を享受し、すでにリタイアして、いまの図書館と図書館員へのエールを送る立場にある人たちが多いようであるが、フォーラム賞の受賞者には、今年の堀内佳美さんのようにタイで「アークどこでも本読み隊」を展開する若い人も現れるようになって、すこし世代交替というか、若手への門戸の開放も進みつつあるようだ。

筆者が第九回図書館サポートフォーラム賞をいただいた二〇〇七年の四月は、まだ歳も五〇の直前で、若くはないが現役感は十分だった。が、それから七年、とうに四捨五入すれば還暦の六〇に手が届きそうになり、いわゆる「定年」までも三年の時間を切っており、少しずつだがその現実感は増している。定年後、雇用延長などの制度があって、今の職場に幾ばく残ったとしても、定年は定年である。

一度、史学で学部を卒業して就職し、三年ほどの社会人経験の後、図書館情報大学に第三次に編入学して、二年間を筑波でお世話になった。つまりは新卒に比べて五年遅れで、いまだ言う就活を前にしたとき、図書館員として働くための門戸は、いかにも狭かった。

大学院への進学も考えたが、当時は、働くこと、なによりも図書館で働くことを専一に考えていたので、年齢制限に引っかけられないで、かつ一定人数の採用を堅実にも期待できたのが、当時まだあった国家公務員採用上級乙種試験（区分・図書館学）*の受験で、うまいこと合格して都内の国立大学の図書館に奉職することを第一の目標とした。

一次の一般教養および専門・図書館学の多枝選択式試験を通して、二次試験はたしか本郷で記述式の試験があった。当時、四ツ谷にあった国際交流基金の図書館での夏の図書館実習を一日抜けて受験した。題目はおぼろげな記憶だ

が、「資料保存」か「書誌ユーティリティ」ではなかったか。いずれも当時の図書館情報大学において多く語られていたテーマであったので、幸いにも筆は、進んだ。さらに面接試験もあったように記憶するが、前後、いささか混乱しているかもしれない。

続く一〇月一日、人事院での合格発表を見に行くのは、図情大の編入学の合格発表と同じ程度に緊張し、わくわくしたことであった。そして多くの国立大学図書館を面接に回ることもなく、年内には、都内のT大学の図書館に内定した。

その内定を得ながら、なのに私はそこへ行くことを忌避して、翌年、一九八五年の四月から竹橋の東京国立近代美術館企画・資料課の研究員で資料係員として二度目の仕事を始めてしまっていた。前任の資料係長のT氏は、文部省図書館職員養成所から国立C大学図書館を勤務の後に、国立近代美術館が京橋に開館した一九五二年から二年後の五四年に入館され、以来、一筋に奉職されて、八五年三月に退官されていた。その後釜に私は滑り込んだのである。

図情大の恩師であるF先生は、この私の転身について、直接に叱責なされることはなかったが、大学の後進へダメージのあったことを後に、「当人の事情はあるにせよ、こうした仕打ちには後々の学生にまで響くものである」と、書

かれて私の気儘を暗に諫められていた。

歴史と図書館情報学を学んだだけでは、国立の近代美術館で資料担当の研究員として働き、何かしらの研究成果を残すことは、実際のところ並大抵のことではなかったのは事実であるが、怖さよりも若さで乗り切った。この転身になにほどの意味を築かねばと、焦燥してもいた。

幸いなことに、なによりも職場の先輩同僚からの支援があり、一九八六年の東京、八八年のシドニーの国際図書館連盟IFLA大会への参加、八九年のアート・ドキュメンテーション研究会(JADS)の創設、加えて九〇年の米国政府インターナショナル・ビジター・プログラム(USIA・IVP)の体験(当時TACにおられた京藤さんのご推挙によるもので、あらためてお礼申し上げます)、九四年の「ミュージアム・ライブラリ・アーカイブをつなぐもの(いまで言うMLA連携)」をテーマに掲げた第一回アート・ドキュメンテーション研究フォーラムの開催(於国立国会図書館)などなど、息つく暇もない日々を送ることよって、二度目の就職に関わる私の罪を清算しようとする内心の葛藤を鎮めようとしていた。

以後、東京国立近代美術館と国立新美術館のアートライブラリの開室やら、法人化後の本部情報企画室の始動などのいろいろもあったが、

すでに八五年の竹橋勤務の始まりからもう三〇年の時が過ぎようとしていることに驚くとともに、この先が安泰であるはずもない諸課題があったとしても、ともかく臆首されるほどのミスもなく過ごせたことにあらためて感謝するほかはない。

とこのように、いささか早きに過ぎる私の仕事の振り返りを書いたのには、二つの理由があるようだ。

一つは、このように長い時間を一所において働いた(働いている)ことの後ろめたさというか、「それは、それはラッキーでございましたね」という、私の周りに沢山いる年下の非常勤(非正規)司書(事務・研究補佐員)から聞こえてくるやるせない声。二つ目は、おそらくは私の後任には、すんなりとは後継の新規の常勤研究員が配置されることはないだろう、という現実のあることである。

どうして図書館で図書館員として働くことがこのように、いまのように難しくなってしまったのだろうか。

アートライブラリを目指して、図書館情報学も美術史も学ぼうとする学部学生や大学院前期課程の在籍者がいる。美術史を学んで後に、図書館情報学、あるいは司書課程に学んだ若い既卒者もいる。その中から何人かは、私の身近において非常勤(非正規)司書(事務・研究補佐

員)として、働き始めている。その多くは、当然!のごとくに、採用年限がある。法人化後の国立館においては、五年だ。法人化後すでに二期一〇年がとうに過ぎ、そろそろ三期も終わろうとしている。三〇台だった私の周りにいた年下の非常勤の同僚も、すでに四〇台半ばを過ぎようとしている者が増えている。

いま聞こえてくるのは、彼らの親の介護が、彼らに襲いかかり始めているという手強い現実だ。

一〇年あるいはもっと前ならば、もし君・貴女が図書館員を目指すならば、図書館(専門職)の採用試験だけを受けるのではなく、図書館の設置母体である国や市や町やあるいは大学の職員になることを考えるとよい、採用情報を調べて受けなさい。そしてまずは、組織の中に、塀の内側に潜りこみなさい、と助言していた。図書館員としてあることの意味と望みを失わずに、希望を発露し続ければ、いつかは転属できるはずだ。そのための試験ぐらいは通過しなさいと言ってきた。かつて私も上級乙種を受けたように。その言葉を真に受けて、いま図書館の現場において、常勤(正規)の司書として働く者を複数人知っている。

でも、いまではそのアドバイスは、目の前にいる非常勤(非正規)司書(事務・研究補佐員)には、なかなか通じなくなってしまった。すで

に年齢制限の壁を越えてしまった、時間が、経ち過ぎてしまった。

こんなに図書館で図書館員として働くことを困難にできてしまったことに、いたし方のないことかもしれないのだが、第二の罪を感じている。

せっかく作ったアトライブラリなのに、などとは言わないし、言えない。いまの図書館のモデルを作ったことの反省を踏まえて、ライブラリを再構築することなど、私の残された常勤職員でいる時間のキャパの範囲では、到底リカバリーできないほどに、私と私たち以前の世代の図書館員の能天気さの罪はきつと大きいに違いない。

ということとは、この図書館サポートフォーラムのサポートのあり方もやはり大きな曲がり角に立っているということもまた切実に思わなければ、いまの図書館の過酷さから一足お先に逃げおおせた者の無邪気なエールなどは、いま、図書館において働く、働こうとする、その当事者の耳に届くはずもないだろう。

しかしながら、では、さて、どうすれば良いのだろうか…。

級試験とともに廃止され、Ⅱ種試験となり、平成十六年度には図書館学の区分は廃止された。現在は、地区ごとの国立大学法人等職員採用試験となっており、事務系図書という枠で採用試験が行われているようだが、実態を詳らかにするものではない。

* 上級乙種試験は翌年（昭和六十年度）に中



編集後記

「ふぉーらむ」11号をお送りします。

寄稿者の水谷さんも触れられているとおり、図書館サポートフォーラム賞を最年少で堀内佳美さんが受賞されました。同時に受賞された栗田明子さんと合わせて国際的な活動としてそれぞれ全国紙に取り上げられました。

事務局として関わるようになってから、もう5年近くが経ち、図書館サポートフォーラム賞を受賞された方とお会いする機会も増えました。受賞を契機としてたかに活動に励まれているお話を伺い、図書館の現場で頑張っている方々をサポートしようというLSFの役割が少しは果たすことができたのかなとささやかな喜びを覚えます。

活動はLSF会員の皆さんの情報が頼りです。来年もよろしくお願いします。

(岩本)

図書館サポートフォーラム賞の栗田明子様が第7回ゲスナー賞「本の本」部門銀賞を受賞されました。自分事のようにうれしいですね。

今号は金沢幾子さんが「展覧会から目録から来日人名を知る」、菊池佑さんが「日本病院患者図書館協会創立40周年を振り返って」、平川千宏さんが「私の出合った人・本・山—あるライブラリアンのあゆみ」出版始末記」と、ご三方のデビュー記事が載りました。

新人発掘とっていいのかな。これからLSF道をまい進されるものとエールを送っています。

(森本)

ふぉーらむ 第11号

2014年11月21日発行

発行人 山崎久道

製作 森本浩介／岩本謙一／齋藤香織／赤田麻衣子

発行所 図書館サポートフォーラム

〒143-8550 東京都大田区大森北 1-23-8

日外アソシエーツ(株)内

TEL.03-3763-5241 FAX.03-3764-0845

http://www.nichigai.co.jp/lib_support/index.html

